

## 一部遠航記：附録 貳

著者	B0Z
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 3 9
ページ	[附2] 1 - [附2] 5
発行年	1911-02-28
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6152">http://hdl.handle.net/2298/6152</a>

# 一部遠航記

B O Z 記

試験も漸く昨日で了つた。之からの二週間が即吾等の天地である。字引もない、獨乙語もない。唯存る物は我五尺の軀軀が焔の如き活動である。我等が待ちに待つた遠航である。楽しき海に廻り合つて、心行くばかり氣を伸し腕を鍊る事である。

十二月廿五日、朝の寒さを犯して里餘の道を、艇庫に集つた者七名……二部三部の遠航隊は既に出發したのだらう。艇庫の中には緑色の阿蘇が唯一隻残つて居た。

空は晴れても尙身にしむ川風に、肌を刺されながら艇を降したのは丁度十時過ぎ——寂びれた冬の空を行く雲の影が、冷く浮ぶ水を乱して、霜枯れの野を海へ海へと降りて行く。緑の水にヒヤシンスが咲き漂ふ姿は、霜に枯れ寂びれた今日は求むる由もない。正午川尻に着いた。一度オールを握れば試験の疲等は何處かへ飛んで行つて了つた。然し學期末にサンザン立山に猛惡な物を喰はされた上句だから、一同腹掃除の爲め謹んで鰻飯を喰つた。無論例の若松や下座敷は汚いが鰻は依然として鰻である。

二時再度漕ぎ出した。勢良く川尻を切つて、川を下り、川口で林田君上陸の爲め一時艇を岸に附けた。此寒さをも厭はず、綠俱樂部の幹事として、我一行を此處迄送つてくれた同君の好意を多とする。

斯くて愈々有明の海に乗り出した。折柄の満潮に海は少しの風もない。波も穏かなうねりを見せて心地好く艇を打つ。船首を左に轉じて三角に向ふ。水に浮ぶ鴨、空に飛ぶ鷗の如何にも長閑な姿を眺めては心は自

ら浮世の俗塵をはなれて、自然の懷に入る、  
高く裾をかゝげて、海の彼方に聳ゆる温泉岳は、何時見てもうれしい山である。幾重に折れ込んだ谷々且つては焔の如き溶岩を流した事もあらう雲行來する山嶺も、且つては、怖ろしき火の種を中天に上げた事もあらう。

小手をかざせば、船首の向ふ所、三角か嶽は、海を壓して立ち、首を廻せば舟足の過ぐる所、金峯山は海の鏡に其雄姿をうつして居る。

塵と馬糞の熊本に居て、日々古人の糟粕を注入せらるゝ吾等の頭も、斯く洋々たる有明海に出て、斯く伸びやかな景色を見ると、もう靜かにして居られぬ程愉快である。「板子一枚其下は、地獄」と云はるゝ舟乗りとなつて、今日しも、寄せ來る萬波をしのぎ、風を切つて進む時は眞に吾等は海洋の覇者である。

空は何時か曇つて來た。短き冬の日は何時か 雲の彼方に落ちて、潮風横さまに舷を打ち、又云ふ可からざる愉快がある。

一行一日の元氣は益々盛であるが、日は既に暮れかゝり、月は曉方でなければ出ぬ、止むなく赤瀬に一泊する事とした。

何時か日はトツブリと暮れはてた。

此所は鑛泉浴場で立派な宿屋があると聞いて居たが、行つて見ると夕闇の星明りに、大きな建物が二つ見える。先海岸の方の奴を尋ねると、入口には何か澤山置いてあつて容易に入られぬ。やつこの事で這入つて玄關と思はしき所の戸を頻りに叩いたが、遂に何の返事もない、無い筈だ。翌朝見れば玄關と思つたのは便所

であつた。次に今度は山に沿うた方の家を訪ねた。戸は既に閉されて中に燈火の影も洩れぬ、目茶苦茶に戸を打つ事數度又數度漸く返事を得て、兎も角も此處で一夜を明かす事とした。中に入ると間敷は可なり多いが寂然として化物でも出さうである。何でも冬は客が全く無いので業を休むのだそう。翌早朝出發の考で早く床に就いた。然し夜半から暴風雨と變じ彼の音は軋々と、イヤに耳をかすめて屢々夢を破られた。

廿六日、未明床を出て見れば前夜來の雨は止み空には星の光が見わる、風は少しも衰へぬ波は相變らず激しく岸にぶつかつて居る燈火の下で朝飯を終つたがボートを出し得る見込も無い。一同失望のあまり徒歩で三角に遊ぶ事に決した、三角はやはり懐しい。師走を控へた舟附場は何となく活氣に満ちて居る。飽く迄日に焼けた船頭衆の偽らざる態度は海に育つた人の特色である。此所で晝食を終り二時前歸途に就た、若し波が鎮まつたならば夕方の満潮を待て艇を浮ぶる考であつたが風は少しも衰へず波は相變らず高いので止むなく此度も亦幽靈屋敷に宿泊する事となつた、

廿七日、早朝目を醒して見れば波の音は少しも聞へない一同床を蹴て立ち朝飯も喰はずに乘艇の準備をした。弦月は斜に山の一角に懸つて星の光も其所此所に如何にも冬と云ふ感は空に充ちて居る。寒さは厳しく艇上に霜の華を咲かせて手足は殆ど無感覺となつた、漕ぎ出した時は夜は尙全く明け離れて居らぬ。目指す三角の燈臺は烈しい光を尙千波萬波の上にたどす。三角に着いてから旅館宇土屋に入り朝飯をすました。斯くて此所を此度の練習の根據地と定めた。宇土屋の前身は彼の廣島屋で當時に於ては剛健鬼をも挫く様な撰手連もある特種な刺戟を受けて頗る骨を抜かれそうだ、「三角出る時オールが重い、重い筈だよ氣が残る」とは兩三年前唱はれた句だそう、今は宇土屋と變じて特種な刺戟は影もない、若しあつた所で意氣を以て

天下に立つ一行には全く風馬牛であらう。オールを握る外は眼中何物もない腕をねり氣を養ふ外は喰喰つて遊ぶ丈けである。廿七日は三角港内での練習に費し夜に入つては各自匿し藝、手品等を出した。中にも五嶋出身の美知彦君は最も手品に巧なるより謹んでドクトル、ファウストの名を進呈した。福岡出身の某君はグイーア、ダンスに妙を得て満座の者を抱腹せしめた、同君は艇庫出發以來常に五高野球撰手中殊に名高き。〇〇其人の身上を氣遣つていつも其名を口にせざる時はない。従つて、一同其心中を思ひやつて神經衰弱にでもなりはしないかと心配して來たが此夜のこの有様を見て稍々安堵の思をした。此夜宿から餅をくれたが吾々の内にはこれを噛む事もなく其まゝう呑みにして自由に腹の中に入るゝ事の出来る人もあつた、これは一行中で最も背の高い人だ、

晴廿八日、早朝から際崎附近に出て練習し晝食のため本陣に引き上ぐる途中二部の乗れる白艇を見たが距離が遠くその面々は知る事も出来なかつた。只遙に相呼應するのみであつた、太田君が今日の午后六時何分の汽車で歸る事となつたから夕飯後ボートで際崎迄見送つた歸途オールを水に入ると毎に夜光虫が其光を放つのは美觀また云ふ可らざるものがある、此夜は風が少々強いので艇の繫留に困難したが親切な漁師から錨を借つてやつと浮べて置く事が出来た。やはり海に育ち海を我家とする人々には、一片汚れた心がない。我等は此無名の一美人に深く感謝の意を表す。

廿九日、今日は愈々一同歸校と定まり艇に乗り込んだのは九時半だ、港外に出ても幸に大した波もなく一同勇を奮て漕いだ、然し折柄潮は逆に寄せて舳槍しい響を立てる漕いでも舟は進まぬ。なにしろ有明海は沙の干満を以て有名な海である。漕ぐ間にも見る間にも潮は遠慮なしにドン／＼退く、遂に住吉沖に來

た頃は全く干潮となつて非常の困難を感じた。二丁の渡場に着たのは最早二時半。空腹を感じる事甚だしく岸に上つた時は臍が脊骨に同盟して饑じいために口もきけず歩行も意の如くならぬ位であつた、三角から携へて來た握飯を開いたがこればかりでは何んの足らうぞ。却つて徒に腹の虫を誘ふのみである。田舎饅頭の數十個も瞬く間に平げてしまつた三時此所を乗り出したが干潮時とて水流に逆航し艇の進行甚だ困難を極めた、けれども一同益勇を鼓して川尻に着いたのは午后五時過、數日間鍛つた事だから勇氣は益々出て來る風も、水流も、我等の向ふ所伏せざるない。然し己にとつぷりとくれ月も出ない。止むなく此所に一泊する事となつた、此夜の宿屋は湯屋兼業で客を容るべき室らしいものもなく一行五人は狭苦しい一室に押込められた然し尙ほ、拍餅や押餅を演しなかつたのは幸である、將に寢に就かんとする頃某君が古新聞で作つた袋に蜜柑を買つて來たがこの新聞は校友の誰かど讀んだものであらう内側に「由比生徒監、今井舎監、某々先生等と列記し又乗杉○○生徒監、探偵犬……」と大書してある博聞にて強記、賢明にして世事を知り、才氣煥發すると自信し居給ひし乗杉前生徒監は何故に斯様な文字を附加せられ給ふのであらうか、自信は天才であると云ふのが眞理ならば先生は才子的天才である、先生が若し今猶ほ母校に在職せらるゝならば序に此處に筆を染めてもよいが吾人は今はもう何も云はぬ事でしょう、

曇卅日、目的地たる江津湖も一呼吸で達せらるゝ近距離に在る事とて急ぐ必要もなく日高うして艇に乗り込み途中中之瀬の饅頭を味ひ艇庫に付いたのは丁度十二時、これで吾々の遠航も無事に終を告げた。今回の遠航の表面に現れた事の大体を此所に記す次第である、遠航隊參加の人々は左の六名。

平澤 幹 大庭 孝文 石川 豐記 村上 義臣 井上 庫定 太田 鎮雄